北海道医歌人会詠草

渡辺淳一氏を想う

札幌　古屋　統

同人誌集い競いし日は遠し弔電打たずひそかに送る
中城はどんな女と訊ね来て話題女性の虚と実を書く
若き日の豪語は今も耳に在り芥川ぐらいは何時でも書ける
常言えり珠玉の短篇意味持たず大作なくて名は残らずと
五十四枚朝から書いたと腕さすり二時間遅れて四谷の酒房

遅き春

美唄　吉村　誠治

日に乾くホームのベンチに独りなり線路に残る雪を見ている
この三日気温の上り我が庭の積りし雪は目に見えて減る
蔵出しの大吟醸をいただきぬ夕飼の肴あれこれと言ふ
航空会社の面接終へて帰り来し美穂は奇麗に大人びて見ゆ
夜の更けて東京土産と持ち来しは文明堂のカステラなりき

苔

札幌　浜島　泉

いつの間に育ちしものぞキャラボクに敷くジュウタンを思はする苔
我がひいき打ち負かしけるピッチャーが本場の試合に登板せりと
積み上げて雪壁高さ身の丈に彼岸の雪を投げあげんとす
舗装路の凍りし雪が日を受けて潤(うる)ひて融けつ水と流れつ
雪長靴(ゆきちょうか)履き新雪を踏みて行く吹き溜まり越ゆ息を荒げつ

道東を走る

釧路　児玉　昌彦

草原を右から左へ渡る虹車を駆ってあとを追うなり
何事ぞ虹の足もと七色にまばゆく光る家見つけたり
みぞれ降る峠をあとに走り行けば雲間の光野にさしいずる
暮れなずむ水平線に一筋の白き残光なお輝きて
夏の陽の光溢れる十勝越え海霧たなびく釧路に入りぬ

吾が街

旭川　稲積　文子

工場の煙が三本立並び静かに明ける吾が旭川
朝焼けを背景にして真っ黒な煙が三本立ち昇る街
バタバタと激しく争い残された鴉は一羽息引き取りぬ
非情なる死の瞬間を目前に鴉なれども澄みし目いとし
やるせなく友を偲びて口ずさむ抒情詩よ友は戻らず

グローバルとは

江別　三宅　浩次

グローバルという掛け声に踊らされそれ真実かと眉に唾して
その数が一パーセントの金持ちに世界の未来が牛耳られると
無利息が資本主義の終焉と語る学者に耳傾ける
経済が第一という国策に振り回される国民哀れ
強国の勝手放題許されぬ権力者なる非人格者よ